

Léonard  
Foujita  
藤田嗣治

# レオナルド・フジタ展



## パリへの視線



画家レオナルド・フジタ(藤田嗣治、1886-1968)を語る上で、パリそしてフランスと切り離すことはできません。1913年に渡仏後、1921年のサロン・ドートンヌに出品した裸婦が「すばらしき乳白色」と高い評価を受け、パリ画壇にその地位を確立します。時を経て、第二次世界大戦後に再びパリの地を踏み、フランス国籍を取得。1968年に歿するまでこの国で生きることを選びました。あたたかもフランスへの愛に殉じたかみえるフジタの生涯ですが、そこには単なる憧憬や賛美の念にとどまらない、異邦人ならではの複雑な距離感や思いをみてとることができます。初めてパリの地を踏んで以降、この街に対するフジタの視線はどのように作品にあらわれ、いかなる変化をたどったのでしょうか。本展は、ポーラ美術館のコレクション約170点をもとに、パリ滞在の初期から再渡仏を経た1960年代までのフジタの画業をご紹介します。そのなかで、ルソーやピカソから影響をもたらした同時代の画家の作品をあわせ、フジタがパリに何を見出していたのか、その視線の軌跡をたどります。



1.レオナルド・フジタ(藤田嗣治)《自画像》1929年 水彩、墨/絹本 2.レオナルド・フジタ(藤田嗣治)《秋》1953年 油彩/カンヴァス  
3.レオナルド・フジタ(藤田嗣治)《少女と果物》1963年 油彩/カンヴァス 4.レオナルド・フジタ(藤田嗣治)《風船売り》1959年頃 油彩/ファイバーボード  
5.レオナルド・フジタ(藤田嗣治)《床屋》1958年 油彩/ファイバーボード ※作品は全てポーラ美術館蔵  
©Fondation Foujita / ADAGP,Paris&JASPAR,Tokyo,2014  
D0731

### 第1章:アヴァンギャルドのパリへ-エコール・ド・パリ前夜

1913年に渡仏したフジタは、ピカソやモディリアーニなど、のちにエコール・ド・パリを形成する画家たちとの交流を通して、彼らとは異なる独自の人物表現を追求。ここではフジタの名を不動のものとした「すばらしき乳白色」を生み出す成り立ちを追います。

### 第2章:アトリエにて-不在のパリをめぐる

1920年代に一躍パリの寵児となったフジタ。日本に帰国後、再度パリに戻った彼は、子どもを主体とした絵画を数多く制作。アトリエ=閉じられた空間で描く匿名的な少女や動物群像などには、二つの国の間で揺れ動くフジタの複雑な心境が垣間見られます。

### 第3章:「私」のパリ-「小さな職人たち」

1950年代末に集中して制作された「小さな職人たち」は、パリという街とそこに息づく人々の営みを主題とする連作。小さなボードに込められた子どもたちへのまなざしは、フジタのパリへの敬意とこの街に抱く複雑な感慨をもうかがわせています。

子どもたちの  
まなざし



上田市立美術館  
UEDA CITY MUSEUM OF ART

●上信越自動車道「上田菅平I.C.」から車で約15分  
●北陸(長野)新幹線「上田駅」から徒歩約7分  
上田市立美術館 Tel.0268-27-2300  
お問合せ 信越放送テレビ局 Tel.026-237-0545 土曜休館 10:00-17:00